

第15回 日本アディクション看護学会学術集会開催報告

心光 世津子

(武庫川女子大学看護学部准教授・学術集会実行委員長)

<1日目>

会長講演「看護における多様性と感情」 寶田 穂 (武庫川女子大学看護学部教授)
基調講演「自由であること・とらわれること」 武井 麻子 (日本赤十字看護大学名誉教授)
特別講演「発達障害とトラウマ～アディクションからコネクションへ～」
大久保 圭策 (大久保クリニック院長)
特別企画「アディクション・ライブラリー～アディクションについて『語る本』の図書館～」
交流集会2件、一般演題2セッション (計8件)、ポスターセッション (3件)

<2日目>

教育講演「家族支援の見立て～Negativeな連鎖からPositiveな連鎖へ～」
倉石 哲也 (武庫川女子大学文学部教授)
ランチョンセミナー「痛みとアディクション～生きるために自分を壊す以外の方法を求めて～」
倉田 めば (薬物依存症回復支援団体 Freedom 理事)
シンポジウム「アディクション問題における感情とケア～支援の連鎖をめざして～」
座長：宮本 真巳 (亀田医療大学看護学部教授)
米山 奈奈子 (秋田大学大学院医学系研究科教授)
シンポジスト：奥村 純子 (岐阜県看護協会専務理事・保健師)
松本 良枝 (大阪府立高等学校指導養護教諭)
辻本 直子 (有限会社オラシオン代表取締役・精神保健福祉士)
大川 和男 (国立病院機構下総精神医療センター看護師)
交流集会4件、一般演題2セッション (計8件)

看護学部初の学会開催

平成28年9月3日(土)・4日(日)の2日間、第15回日本アディクション看護学会学術集会を本学中央キャンパスの日下記念マルチメディア館にて開催いたしました(写真1)。これが看護学部新設後初の学会開催となりました。



写真1 当日の中央キャンパス正門

日本アディクション看護学会は、アルコール依存、薬物依存、ギャンブル依存、ネット依存、自傷行為などのアディクション(嗜癖：わかっていてもやめられない状態)に関する問題とそのケアにとりくむ臨床家・研究者の学会です。アディクション問題は、さまざまな困難事例の背景に存在することがあり、精神科看護だけでなく、救急医療や生活習慣病のケアなど、多岐にわたる分野の看護に関わります。



写真2 会長講演



写真3 一般演題セッション会場

このアディクション看護学会は、これまで東日本を中心に学術集会を開催してきた経緯があります。今回は初めての西日本開催として本学が開催校となり、寶田穂会長のもと1年以上前より準備を進めてまいりました。会員は関東を中心とした看護師・看護学研究者が大半でしたので、参加者がどれほど集まるだろうかと心配しておりましたが、杞憂に終わりました。

当日は、全国から看護師、精神保健福祉士、心理士、当事者、ご家族などさまざまな立場の、約300名という例年を上回る数の参加者があり、大変活発な交流が行われました(写真2、3)。関西をはじめとした西日本の非会員の専門職の方々も多くご参加くださいました。

テーマを軸に アイデアを凝らしたプログラム

本学術集会では、テーマを「依存症と感情～拒否の連鎖から支援の連鎖へ～」といたしました。前述のように、現場で困難事例とされている対象や家族の背景にしばしばアディクション問題が潜んでいます。本来はこの背景にこそケア・支援の目が必要であるにもかかわらず、事例の「困難」な面に目が向き、拒否の感情が生まれ、さらに、その感情が相互理解を阻んでいることもあるのではないのでしょうか。こうした問題意識のもと、対象への理解を深め支援の連鎖へと向かうには何がカギとなるのかを考えていきたいという思いがこのテーマに込められています。

チラシや抄録集(写真4)で用いたテーマ画像は、企画運営委員の一人で、写真家であり薬物依存症回復支援団体Freedomの代表もされている倉田めば氏の作品です。本学術集会のために「希望の光」や“人とのつながり”が伝わってくる素晴らしい作品をご提供くださいました。

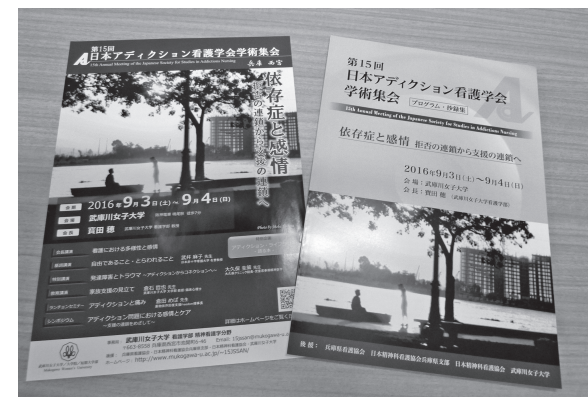


写真4 チラシ(左)と抄録集(右)

そして、このテーマのもと、各分野でご活躍されている先生方に講演やシンポジウムでのご登壇をいただきました。講演者・シンポジストの先生方は、さまざまな角度から「依存症と感情」について振り返り、考えるような内容のお話をしてくださいました。

「語り」をテーマとした特別企画 ～アディクション・ライブラリー～

加えて、本学術集会では1日目の特別企画として「アディクション・ライブラリー～アディクションについて『語る本』の図書館～」を開催いたしました。学会内の企画として行うのは初めての試みでした。

これは、人間が「本」になり、参加者に30分貸し出され、本が語るという企画です。NPO法人暴力防止情報スペース・APIS発行の「生きている図書館実施ガイド ～暴力・対立防止、多様性の理解を深めるために～(2010年)」を参考とし、本企画の趣旨に応じた企画運営をいたしました。

アディクション問題の背景には「生きづらさ」があり、さらに、その「生きづらさ」の背景には非常に多様な価値観、生き方、家族のありようや葛藤があります。時に、看護する者もその多様性に圧倒され葛藤しますが、当事者がどのような世界に生き回復している



写真5 読書の様子
(プライバシー保護のため加工しています)

のか、支援の場で家族・支援者にどのようなことが起こるのかを知ることで、共感的理解につながるようにも思われます。

当日は、12名の薬物依存、アルコール依存、ギャンブル依存などの当事者、家族、支援者が、それぞれ11冊(1冊は共著)の「本」となり、参加者に「貸し出されて」いきました。1回の貸出時間は30分。会場のそこに語りの輪ができ、依存症からの回復、家族の回復などさまざまな物語が共有されていました(写真5)。

魅力的な応募企画の数々

また、本学術集会では、応募により、以下の6つの交流集会企画が行われました。

1. WRAP(元気回復行動プラン)体験クラス
- WRAPの実際と
アディクション看護への可能性-
2. 条件反射制御法(CRCT)ってなに?
3. アディクション問題にかかわる援助職者サポートグループ 2016年
4. 表現アーツセラピー 自分のために過ごす時間:
表現でこころのストレッチ
5. アディクション看護の事例検討会
6. 性犯罪被害者の再犯防止に対する認知行動療法の実際

最新の治療・療法についての情報・意見交換をはじめ、看護実践を振り返る事例検討会、援助職者のサポートにつながるアーツセラピーや体験グループといった多様な企画が集まりました。このほか、さまざまな場でとりくまれた研究発表も応募があり、多層的で多様な観点からアディクション問題にとりくむプログラムとなりました。

学術集会の期間中、講演・シンポジウムと常に並行して何らかの交流集会、演題セッションが常に複数おこなわれており、どのプログラムに参加しようかと迷われる参加者も若干いらしたようでした。大学研究室メンバーでチームのように分かれて参加されている方々も見受けられました。

おわりに

本学術集会の開催にあたっては、武庫川女子大学から後援をいただきました。諸手続きや段取りにつきましても、学内の経験豊富な教職員の皆様よりさまざま

なご助言をいただき、準備を進めることができました。そして、実行委員・実行協力員・ボランティアとして学外の10名の方々、37名の本学看護学部教職員および大学院生、学部生の皆様から事前・当日のご支援をいただきました。このうち、ボランティアとして参加してくれた看護学部生11名は、来場者の誘導や、クローク受付など他のスタッフと共に、テキパキと、かつ楽しく元気に、若い力で学術集会を支え盛り上げてくれました。

不慣れな学術集会運営の中、至らぬ点もあったことと思いますが、本学術集会が盛会に終わりましたのも、参加者の皆様、開催にご協力くださいました多くの皆様のおかげと、感謝いたしております。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。